人魚の祠

泉鏡太郎

青空文庫

一

「いまの、あの婦人が抱いて居た嬰兒ですが、鯉か、鼈ででも有りさうでならないんですがね。」

「……」

私は、默つて工學士の其の顏を視た。

「まさかとは思ひますが。」

赤坂の見附に近い、唯ある珈琲店の端近な卓子で、工學士は麥酒の硝子杯を挾へて云つた。

私は卷莨を點けながら、

「あゝ、結構。私は、それが石地藏で、今のが姑護鳥でも構ひません。けれども、それぢや、貴方が世間へ濟まないでせう。」

六月の末であつた。府下澁谷邊に或茶話會があつて、斯の工學士が其の席に臨むのに、私は誘はれて一日出向いた。

談話の聽人は皆婦人で、綺麗な人が大分見えた、と云ふ質のであるから、羊羹、苺、念入に紫袱紗で薄茶の饗應まであつたが——辛抱をなさい——酒と云ふものは全然ない。が、豫ての覺悟である。それがために意地汚く、歸途に恁うした場所へ立寄つた次第ではない。

本來なら其の席で、工學士が話した或種の講述を、こゝに筆記でもした方が、讀まるゝ方々への利益なのであらうけれども、それは殊更に御海容を願ふとして置く。

實は往路にも同伴立つた。

指す方へ、煉瓦塀板塀續きの細い路を通る、とやがて其の會場に當る家の生垣で、其處で三つの外圍が三方へ岐れて三辻に成る……曲角の窪地で、日蔭の泥濘の處が——空は曇つて居た——殘ンの雪かと思ふ、散敷いた花で眞白であつた。

下へ行くと學士の背廣が明いくらゐ、今を盛と空に咲く。枝も梢も撓に滿ちて、仰向いて見上げると屋根よりは丈伸びた樹が、對に並んで二株あつた。李の時節でなし、卯木に非ず。そして、木犀のやうな甘い匂が、燻したやうに薫る。楕圓形の葉は、羽狀複葉と云ふのが眞蒼に上から可愛い花をはら〳〵と包んで、鷺が緑なす蓑を被いで、彳みつゝ、颯と開いて、雙方から翼を交した、比翼連理の風情がある。

私は固よりである。……學士にも、此の香木の名が分らなかつた。

當日、席でも聞合せたが、居合はせた婦人連が亦誰も知らぬ。其の癖、佳薫のする花だと云つて、小さな枝ながら硝子杯に插して居たのがあつた。九州の猿が狙ふやうな褄の媚かしい姿をしても、下枝までも屆くまい。小鳥の啄んで落したのを通りがかりに拾つて來たものであらう。

「お乳のやうですわ。」

一人の處女が然う云つた。

成程、近々と見ると、白い小さな花の、薄りと色着いたのが一ツ一ツ、美い乳首のやうな形に見えた。

却説、日が暮れて、其の歸途である。

私たちは七丁目の終點から乘つて赤坂の方へ歸つて來た……あの間の電車は然して込合ふ程では無いのに、空怪しく雲脚が低く下つて、今にも一降來さうだつたので、人通りが慌しく、一町場二町場、近處へ用たしの分も便つたらしい、停留場毎に乘人の數が多かつた。

で、何時何處から乘組んだか、つい、それは知らなかつたが、丁ど私たちの並んで掛けた向う側——墓地とは反對——の處に、二十三四の色の白い婦人が居る……

先づ、色の白い婦と云はう、が、雪なす白さ、冷さではない。薄 櫻の影がさす、朧に香ふ裝である。……こんなのこそ、膚と云ふより、不躾ながら肉と言はう。其胸は、合歡の花が雫しさうにほんのりと露である。

藍地に紺の立絞の浴衣を唯一重、絲ばかりの紅も見せず素膚に着た。襟をなぞへに膨りと乳を劃つて、衣が青い。青いのが葉に見えて、先刻の白い花が俤立つ……撫肩をたゆげに落して、すらりと長く膝の上へ、和々と重量を持たして、二の腕を撓やかに抱いたのが、其が嬰兒で、仰向けに寢た顏へ、白い帽子を掛けてある。寢顏に電燈を厭つたものであらう。嬰兒の顏は見えなかつた、だけ其だけ、懸念と云へば懸念なので、工學士が——鯉か鼈か、と云つた

のは此であるが……

此の媚めいた胸のぬしは、顔立ちも際立つて美しかつた。鼻筋の象牙彫のやうにつんとしたのが難を言へば強過ぎる……かはりには目を恍惚と、何か物思ふ體に仰向いた、細面が引緊つて、口許とともに人品を崩さないで且つ威がある……其の顔だちが帶よりも、きりゝと細腰を緊めて居た。面で緊めた姿である。皓齒の一つも莞爾と綻びたら、はらりと解けて、帶も浴衣も其のまゝ消えて、膚の白い色が颯と簇つて咲かう。霞は花を包むと云ふが、此の婦は花が霞を包むのである。膚が衣を消すばかり、其の浴衣の青いのにも、胸襟のほのめく色はうつろはぬ、然も湯上りかと思ふ温さを全身に漲らして、髪の艶さへ滴るばかり濡々として、其がそよいで、硝子窓の風に額に絡はる、汗ばんでさへ居たらしい。

ふと明いた窓へ横向きに成つて、ほつれ毛を白々とした指で掻くと、あの花の香が強く薫つた、と思ふと緑の黒髪に、同じ白い花の小枝を活きたる蔓、湧立つ蕊を揺がして、鬢に插して居たのである。

唯、見た時、工學士の手が、確と私の手を握つた。

「下りませう。是非、談話があります。」

立つて見送れば、其の婦を乗せた電車は、見附の谷の窪んだ廣場へ、すら〳〵と降りて、一度暗く成つて停まつたが、忽ち風に乗つたやうに地盤を空ざまに颯と坂へ辷つて、青い火花がちらちらと、櫻の街樹に搦んだなり、暗夜の梢に消えた。

小雨がしと〳〵と町へかゝつた。

其處で珈琲店へ連立つて入つたのである。

こゝに、一寸斷つておくのは、工學士は嘗て苦學生で、其當時は、近縣に賣藥の行商をした事である。

二

「利根川の流が汎濫して、田に、畠に、村里に、其の水が引殘つて、月を經、年を過ぎても涸れないで、其のまゝ溜水に成つたのがあります。……

小さなのは、河骨の點々黄色に咲いた花の中を、小兒が徒に猫を乘せて盥を漕いで居る。大きなのは汀の蘆を積んだ船が、棹さして波を分けるのがある。千葉、埼玉、あの大河の流域を辿る旅人は、時々〳〵、否、毎日一ツ二ツは度々此の水に出會します。此を利根の忘れ沼、忘れ水と呼んで居る。

中には又、あの流を邸内へ引いて、用水ぐるみ庭の池にして、筑波の影を矜りとする、豪農、大百姓などがあるのです。

唯今お話をする、……私が出會ひましたのは、何うも庭に造つた大池で有つたらしい。尤も、居周圍に柱の跡らしい礎も見當りません。が、其とても埋れたのかも知れません。一面に草が

茂つて、曠野と云つた場所で、何故に一度は人家の庭だつたか、と思はれたと云ふのに、其の沼の眞中に拵へたやうな中島の洲が一つ有つたからです。

で、此の沼は、話を聞いて、お考へに成るほど大なものではないのです。然うかと云つて、向う岸とさし向つて聲が屆くほどは小さくない。それぢや餘程廣いのか、と云ふのに、又然うでもない、ものの十四五分も歩行いたら、容易く一周り出來さうなんです。但し十四五分で一周と云つて、すぐに思ふほど、狹いのでもないのです。

と、恁う言ひます内にも、其の沼が伸びたり縮んだり、すぼまつたり、擴がつたり、動いて居るやうでせう。——居ますか、結構です——其のつもりでお聞き下さい。

一體、水と云ふものは、一雫の中にも河童が一個居て住むと云ふ國が有りますくらゐ、氣心の知れないものです。分けて底澄んで少し白味を帶びて、とろ〳〵と然も岸とすれ〳〵に滿々と湛へた古沼ですもの。丁ど、其の日の空模樣、雲と同一に淀りとして、雲の動く方へ、一所に動いて、時々、てら〳〵と天に薄日が映すと、其の光を受けて、晃々と光るのが、沼の面に眼があつて、薄目に白く人を窺ふやうでした。

此では、其の沼が、何だか氣味なやうですが、何、一寸の間の事で、——四時下り、五時前と云ふ時刻——暑い日で、大層疲れて、汀にぐつたりと成つて一息吐いて居る中には、雲が、なだらかに流れて、薄いけれども平に日を包むと、沼の水は靜に成つて、そして、少し薄暗い影が渡りました。

風はそよりともない。が、濡れない袖も何となく冷いのです。

風情は一段で、汀には、所々、丈の低い燕子花の、紫の花に交つて、あち此方に又一輪づゝ、言交はしたやうに、白い花が交つて咲く……

あの中島は、簇つた卯の花で雪を被いで居るのです。岸に、葉と花の影の映る處は、松葉が流れるやうに、ちら〳〵と水が揺れます。小魚が泳ぐのでせう。

差渡し、池の最も廣い、向うの汀に、こんもりと一本の柳が茂つて、其の緑の色を際立てて、背後に一叢の森がある、中へ横雲を白くたなびかせて、もう一叢、一段高く森が見える。うしろは、遠里の淡い靄を曳いた、なだらかな山なんです。——柳の奥に、葉を掛けて、小さな葭簀張の茶店が見えて、横が街道、すぐに水田で、水田のへりの流にも、はら〳〵燕子花が咲いて居ます。此の方は、薄碧い、眉毛のやうな遠山でした。

唯、沼が呼吸を吐くやうに、柳の根から森の裾、紫の花の上かけて、霞の如き夕靄がまはりへ一面に白く渡つて來ると、同じ雲が空から捲き下して、汀に濃く、梢に淡く、中ほどの枝を透かして靡きました。

私の居た、草にも、しつとりと其の靄が這ふやうでしたが、袖には掛らず、肩にも巻かず、目なんぞは水晶を透して見るやうに透明で。詰り、上下が白く曇つて、五六尺水の上が、却つて透通る程なので……

あゝ、あの柳に、美い虹が渡る、と見ると、薄靄に、中が分れて、三つに切れて、友染に、

鹿の子絞の菖蒲を被けた、派手に涼しい装の婦が三人。

白い手が、ちら〳〵と動いた、と思ふと、鉛を曳いた絲が三條、三處へ棹が下りた。

（あゝ、鯉が居る……）

一尺、金鱗を重く輝かして、水の上へ飜然と飛ぶ。」

三

「それよりも、見事なのは、釣竿の上下に、縋るゝ袂、飜る袖で、翡翠が六つ、十二の翼を飜すやうなんです。

唯、其の白い手も見える、莞爾笑ふ面影さへ、俯向くのも、仰ぐのも、手に手を重ねるのも其の微笑む時、一人の肩をたゝくのも……莟がひら〳〵開くやうに見えながら、厚い硝子窓を隔てたやうに、まるつ切、聲が……否、四邊は寂然して、ものの音も聞えない。

向つて左の端に居た、中でも小柄なのが下して居る、棹が滿月の如くに撓つた、と思ふと、上へ絞つた絲が眞直に伸びて、するりと水の空へ掛つた鯉が――」

――理學士は言掛けて、私の顏を視て、而して四邊を見た。恁うした店の端近は、奥より、二階より、却つて椅子は閑であつた――

「鯉は、其は鯉でせう。が、玉のやうな眞白な、あの森を背景にして、宙に浮いたのが、すつ

と合せた白脛を流す……凡そ人形ぐらゐな白身の女子の姿です。釣られたのぢやありません。釣針をね、恁う、兩手で抱いた形。

御覽なさい。釣濟ました當の美人が、釣棹を突離して、柳の根へ靄を枕に横倒しに成つたが疾いか、起るが否や、三人ともに手鞠のやうに衝と遁げた。が、遁げるのが、其の靄を踏むのです。鈍な、はずみの無い、崩れる綿を踏越し踏越しするやうに、褄が縺れる、裳が亂れる……其が、やゝ少時の間見えました。

其の後から、茶店の婆さんが手を泳がせて、此も走る……

一體あの邊には、自動車か何かで、美人が一日がけと云ふ遊山宿、乃至、温泉のやうなものでも有るのか、何うか、其の後まだ尋ねて見ません。其が有ればですが、それにした處で、近所の遊山宿へ來て居たのが、此の沼へ來て釣をしたのか、それとも、何の國、何の里、何の池で釣つたのが、一種の蜃氣樓の如き作用で此處へ映つたのかも分りません。餘り靜な、もの音のしない樣子が、夢と云ふよりか其の海市に似て居ました。

沼の色は、やゝ蒼味を帶びた。

けれども、其の茶店の婆さんは正のものです。現に、私が通り掛りに沼の汀の祠をさして、（あれは何樣の社でせう。）と尋ねた時に、（賽の神樣だ。）と云つて教へたものです。今其の祠は沼に向つて草に憩つた背後に、なぞへに道芝の小高く成つた小さな森の前にある。鳥居が一基、其の傍に大な棕櫚の樹が、五株まで、一列に並んで、蓬々〳〵とした形で居る。……さ

あ、此も邸あとと思はれる一條で、其の小高いのは、大きな築山だつたかも知れません。

處で、一銭たりとも茶代を置いてなんぞ、憩む餘裕の無かつた私ですが、……然うやつて賣薬の行商に歩行きます時分は、世に無い両親へせめてもの供養のため、と思つて、殊勝らしく聞えて如何ですけれども、道中、宮、社、祠のある處へは、屹と持合せた薬の中の、何種のか、一包づゝを備へました。――詣づる人があつて神佛から授かつたものと思へば、屹と病氣が治りませう。私も幸福なんです。

丁度私の居た汀に、朽木のやうに成つて、沼に沈んで、裂目に燕子花の影が映し、破れた底を中空の雲の往來する小舟の形が見えました。

其を見棄てて、御堂に向つて起ちました。

談話の要領をお急ぎでせう。

早く申しませう。……其の狐格子を開けますとね、何うです……

（まあ、此は珍しい。）

几帳とも、垂幕とも言ひたいのに、然うではない、萌黄と青と段染に成つた綸子か何ぞ、唐繪の浮模様を織込んだのが窓帷と云つた工合に、格天井から床へ引いて蔽うてある。此に蔽はれて、其の中は見えません。

此が、もつと奥へ詰めて張つてあれば、絹一重の裡は、すぐに、御廚子、神棚と云ふのでせうから、誓つて、私は、覗くのではなかつたのです。が、堂の内の、寧ろ格子へ寄つた方に掛

つて居ました。

何心なく、端を、キリ〳〵と、手許へ、絞ると、蜘蛛の巣のかはりに幻の綾を織つて、脈々として、顔を撫でたのは、薔薇か菫かと思ふ、いや、それよりも、唯今思へば、先刻の花の匂です、何とも言へない、甘い、媚いた薫が、芬と薫つた。」

――學士は手巾で、口を蔽うて、一寸額を壓へた――

「――其處が閨で、洋式の寢臺があります。二人寢の寬りとした立派なもので、一面に、光を持つた、滑らかに艶々した、絖か、羽二重か、と思ふ淡い朱鷺色なのを敷詰めた、聊か古びては見えました。が、それは空が曇つて居た所爲でせう。同じ色の薄掻巻を掛けたのが、すんなりとした寢姿の、少し肉附を肥くして見せるくらゐ。膚を蔽うたとも見えないで、美い女の顔がはらはらと黒髪を、矢張り、同じ絹の枕にひつたりと着けて、此方むきに少し仰向けに成つて寢て居ます。のですが、其が、黒目勝な雙の瞳をぱつちりと開けて居る……此の目に、此處で殺されるのだらう、と餘りの事に然う思ひましたから、此方も熟と凝視ました。

少し高過ぎるくらゐに鼻筋がツンとして、彫刻か、練ものか、眉、口許、はつきりした輪郭と云ひ、第一櫻色の、あの、色艶が、――其が――今の、あの電車の婦人に瓜二つと言つても可い。

時に、毛一筋でも動いたら、其の、枕、蒲團、掻巻の朱鷺色にも紛ふ莟とも云つた顔の女は、芳香を放つて、乳房から蕊を湧かせて、爛漫として咲くだらうと思はれた。」

四

「私の目か眩んだでせうか、婦は瞬をしません。五分か一時と、此方が呼吸をも詰めて見ます間――で、餘り調つた顔容といひ、果して此は白像彩塑で、何う云ふ事か、仔細あつて、此の廟の本尊なのであらう、と思つたのです。

床の下……板縁の裏の處で、がさ〳〵がさ〳〵と音が發出した……彼方へ、此方へ、鼠が、ものでも引摺るやうで、床へ響く、と其の音が、變に、恁う上に立つてる私の足の裏を擽ると云つた形で、むづ痒くつて堪らないので、もさ〳〵身體を揺りました。――本尊は、まだ瞬もしなかつた。――其の内に、右の音が、壁でも攀ぢるか、這上つたらしく思ふと、寢臺の脚の片隅に羽目の破れた處がある。其の透間へ鼬がちよろりと覗くやうに、茶色の偏平い顔を出したと窺はれるのが、もぞり、がさりと少しづゝ入つて、ばさ〳〵と出る、と大きさやがて三俵法師、形も似たもの、毛だらけの凝團、足も、顔も有るのぢやない。成程、鼠でも中に潜つて居るのでせう。

其奴が、がさ〳〵と寢臺の下へ入つて、床の上をずる〳〵と引摺つたと見ると、婦が掻巻から二の腕を白く抜いて、私の居る方へぐたりと投げた。寢亂れて乳も見える。其を片手で祕しけれども、足のあたりを震はすと、あゝ、と云つて其の手も兩方、空を掴むと裙を上げて、

弓形に身を反らして、掻巻を蹴て、轉がるやうに衾を抜けた。……

私は飛出した……

壇を落ちるやうに下りた時、黒い狐格子を背後にして、婦は斜違に其處に立つたが、呀、足許に、早やあの毛むくぢやらの三俵法師だ。

白い踵を揚げました、階段を辷り下りる、と、後から、ころ〳〵と轉げて附着く。さあ、それからは、宛然人魂の憑ものがしたやうに、毛が赫と赤く成つて、草の中を彼方へ、此方へ、たゞ、伊達巻で身についたばかりのしどけない媚かしい寢着の婦を追※す。婦はあとびつしりをする、脊筋を捩らす。三俵法師は、褒にまつはる、踵を嘗める、刎上る、身震する。

やがて、沼の縁へ追迫られる、と足の甲へ這上る三俵法師に、わな〳〵身悶する白い足が、あの、釣竿を持つた三人の手のやうに、ちら〳〵と宙に浮いたが、するりと音して、帯が辷ると、衣ものが脱げて草に落ちた。

「沈んだ船――」と、思はず私が聲を掛けた。隙も無しに、陰氣な水音が、だぶん、と響いた……

しかし、綺麗に泳いで行く。美い肉の脊筋を掛けて左右へ開く水の姿は、輕い羅を捌くやうです。其の膚の白い事、あの合歓花をぼかした色なのは、豫て此の時のために用意されたのかと思ふほどでした。

動止んだ赤茶けた三俵法師が、私の目の前に、惰力で、毛筋を、ざわ〳〵とざわつかせて、

うツぷうツぷ喘いで居る。

見ると驚いた。ものは棕櫚の毛を引束ねたに相違はありません。が、人が寄る途端に、ぱちぱち豆を焼く音がして、ばら〳〵と飛着いた、棕櫚の赤いのは、幾千萬とも數の知れない蚤の集團であつたのです。

早や、兩脚が、むづ〳〵、脊筋がぴち〳〵、頸首へぴちんと來る、私は七顛八倒して身體を振つて振飛ばした。

唯、何と、其の棕櫚の毛の蚤の巣の處に、一人、頭の小さい、眦と頬の垂下つた、青膨れの、土袋で、肥張な五十恰好の、頤鬚を生した、漢が立つて居るぢやありませんか。何ものとも知れない。越中褌と云ふ……あいつ一つで、眞裸で汚い尻です。

婦は沼の洲へ泳ぎ着いて、卯の花の茂にかくれました。

が、其の姿が、水に流れて、柳を翠の姿見にして、ぽつと映つたやうに、人の影らしいものが、水の向うに、岸の其の柳の根に薄墨色に立つて居る……或は又……此處の土袋と同一やうな男が、其處へも出て來て、白身の婦人を見て居るのかも知れません。

私も其の一人でせうね……

（や、待てい。）

青膨れが、痰の搦んだ、ぶやけた聲して、早や行掛つた私を留めた……

（見て貰えたいものがあるで、最う直ぢやぞ。）と、首をぐたりと遣りながら、横柄に言ふ。

……何と、其の両足から、下腹へ掛けて、棕櫚の毛の蚤が、うよ〳〵ぞろ〳〵……赤蟻の列を造つてる……私は立窘みました。

ひら〳〵、と夕空の雲を泳ぐやうに柳の根から舞上つた、あゝ、其は五位鷺です。中島の上へ舞上つた、と見ると輪を掛けて颯と落した。

（ひい。）と引く婦の聲。鷺は舞上りました。翼の風に、卯の花のさら〳〵と亂るゝのが、婦が手足を畝らして、身を※くに宛然である。

今考へると、それが矢張り、あの先刻の樹だつたかも知れません。同じ薫が風のやうに吹亂れた花の中へ、雪の姿が素直に立つた。が、滑かな胸の衝と張る乳の下に、星の血なるが如き一雫の鮮紅。絲を亂して、卯の花が眞赤に散る、と其の淡紅の波の中へ、白く眞倒に成つて沼に沈んだ。汀を廣くするらしい寂かな水の輪が浮いて、血汐の綿がすら〳〵と碧を曳いて漾ひ流れる……

（あれを見い、血の形が字ぢやらうが、何と讀むかい。）

――私が息を切つて、頭を掉ると、

（分らんかい、白痴めが。）と、ドンと胸を突いて、突倒す。重い力は、磐石であつた。

（又……遣直しぢや。）と呟きながら、其の蚤の巣をぶら下げると、私が茫然とした間に、のそのそ、と越中褌の炎のあとの有る尻を見せて、そして、やがて、及腰の祠の狐格子を覗くのが見えた。

（奥さんや、奥さんや――蚤が、蚤が――）

と腹をだぶ〳〵、身悶えをしつゝ、後退りに成つた。唯、どしん、と尻餅をついた。が、其の頭へ、棕櫚の毛をずぼりと被る、と梟が化けたやうな形に成つて、其のまゝ、べた〳〵と草を這つて、縁の下へ這込んだ。――

蝙蝠傘を杖にして、私がひよろ〳〵として立去る時、沼は暗うございました。そして生ぬるい雨が降出した……

（奥さんや、奥さんや。）

と云つたが、其の土袋の細君ださうです。土地の豪農何某が、内證の逼迫した華族の令嬢を金子にかへて娶つたと言ひます。御殿づくりでかしづいた、が、其の姫君は可恐い蚤嫌ひで、唯一匹にも、夜も晝も悲鳴を上げる。其の悲しさに、別室の閨を造つて防いだけれども、防ぎ切れない。で、果は亭主が、蚤を除けるための蚤の巣に成つて、棕櫚の毛を全身に纏つて、素裸で、寢室の縁の下へ潜り潜り、一夏のうちに狂死をした。――

（まだ、迷つて居さつしやるかなう、二人とも――旅の人がの、あの忘れ沼では、同じ事を度々見ます。）

旅籠屋での談話であつた。」

工學士は附けたして、

「……祠の其の縁の下を見ましたがね、……御存じですか……異類異形な石がね。」

日を經て工學士から音信して、あれは、乳香の樹であらうと言ふ。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻十六」岩波書店
　　1942（昭和17）年4月20日第1刷発行
　　1987（昭和62）年12月3日第3刷発行
入力：馬野哲一
校正：鈴木厚司
2000年12月13日公開
2005年11月24日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人魚の祠

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/